『震災を通して』

宮城県塩竈市
尚武殿一森山道場
中学２年生　　渡　會　結　有

2011年３月11日午後２時46分、今迄体験したことのない、激しくも恐ろしい揺れが私達を襲ったのです。

千年に一度と言われる東日本大震災でした。今でも、あの時のことを思うと身体が震えます。その時私は、先輩方と学校内を歩いていました。校舎の窓ガラスが割れ、渡り廊下からは土煙が上がり、友達の悲鳴があちこちから聞こえました。立っていられませんでした。

すぐに母にメールで無事を知らせましたが、その後全く連絡が取れなくなりました。

間もなく、先生から大津波の襲来を告げられました。大きな不安が私を襲いました。家族のことが心配でなりませんでした。なぜなら、私の家は、海の眼の前にあるからです。祖父母は無事か。両親は無事だろうか。弟二人は下校途中ではなかっただろうか。もし家族が津波に流されていたら…。次から次へと最悪な事ばかりが、頭を過ぎりました。その夜、家には帰れず、校舎の三階に泊まることになり、真っ暗な教室で、わずかな毛布を数人で分け合いました。雪が降る程寒い夜でした。家族の事が心配で朝まで一睡も出来ませんでした。

翌朝、学校から徒歩で帰路につきました。歩きながら目にする光景は、道路が大きく曲がり、車は建物につっこみ、何台も重なり、潰れた家が丸ごと道の真ん中にあり、昨日とは一変し、街がすっかり破壊されていました。４時間以上歩いたでしょうか。海岸近くまで来ると、一面が魚やヘドロ、瓦礫で埋めつくされ、足の踏み場もありませんでした。以前の風景が思い出せない。胸が苦しく張り裂けそうになりました。家族一人一人の顔が思い浮かび、命だけでも助かっていて欲しい。それだけでした。家に辿り着き、中へ駆け込みました。母がいました。涙が溢れました。私の声を聞いた父と弟達も、走って来ました。家族の奇跡的な無事を、肩を抱き合って喜びました。

日を追う毎に、多くの人が犠牲になり、甚大な被害があった事が分かって来ました。女川にある父の会社の工場も壊滅状態となり、従業員２名の尊い命が奪われました。剣道仲間とも連絡がとれる様になり、津波で家族を失ったり、家を流されたり、避難所生活を余儀なくされた仲間がいる事が分かりました。私なんかよりずっと大変な思いをしている人がたくさんいました。自然の猛威のむごさに辛く悲しい思いは消えませんが、会社の再建に向けて必死に頑張っている父の姿を見るにつけ、自分も何かしなければという思いにかられました。そこで、母と弟二人とで始めたのが、会社のトイレ掃除でした。トイレは皆が必要とする場所ですが、誰もなかなか手をつけません。20ヶ所以上もあるトイレの溜まった汚物をかき出し、全て綺麗にしました。自分にも役に立てる事があるのだと少し嬉しくなりました。

震災から１ヶ月程経ったある日、仲間から稽古再開の連絡が入りました。正直なところまだ戸惑いがありました。稽古どころか、防具や竹刀も失ってしまった友人がいるのに、自分だけ再開しても良いのだろうか。しかし、だからといってずっと今のままで良いのだろうか。そんな思いを持ちながら、稽古を再開しました。何かが違う。今までと…。心地よい汗。喜びと充実感。これまで、あたり前だと思っていた稽古があたり前ではないということを初めて知りました。嬉しい！有難い！心底そう思いました。

震災は私達に大きな試練を与えました。しかし、大切なことを私に気づかせてくれました。家族、学校、地域の人々に囲まれ、水や電気のある日常生活が、決してあたり前のものではないということをつくづく思い知りました。そして何よりも奇跡的に助かったこの命に感謝し、私はこれからも大好きな剣道を通して、心身を鍛え、自分を成長させていきたいと思います。